

ている。一方シロアリにとって、カビが増えすぎると卵まで殺されてしまうこともあるものの、このカビの他の糸状菌やバクテリアに対する抵抗性により卵の生存率が上がっていることを示している。また第2章にあるように、シロアリは腸内にセルロースを分解できる微生物を共生させることで、難分解性の化合物を利用している。このように、人間の目に見えない微小なスケールで、シロアリと微生物のせめぎあいが存在するというのが面白い。

現在、著者らはシロアリ、特に王や女王の長寿命（時に30年以上もありえると推定されている）や遺伝的な不老不死（女王の単為生殖による遺伝子の継承を著者はこのように書いている）に着目し、その長寿命のメカニズムを最新の分子生物学的分析などを用いて解明しようと試みているとのことである。これらの研究は将来的に、人間の寿命のメカニズムの解明などにも繋がり得るであろうし、昆虫生態学、生態学という枠組みを超えた研究に展開することが予想できる。

現在、私を含む研究グループは東南アジアで伐採や火災など人為活動を受けて荒廃しつつある熱帯泥炭地での物質循環機構について現地調査を行っている。私の専門は生物地球化学（Biogeochemistry）であり、特に水移動に伴う物質の循環について水質の量的・質的分析や土壌での炭素分解等についての調査を進めている。奇遇なことにシロアリの研究者にも加わってもらえ、火災など荒廃を受ける前後の泥炭地でのシロアリの種数変化や、分布の変化などを調査してもらっている。ここで我々は有機物分解という事象を介して共同研究を開始した。泥炭地の有機物分解は微生物やシロアリによって主に行われ、その結果大気中への二酸化炭素の放出に繋がる。泥炭地に森林植生がある場合には、植生による光合成を通じて二酸化炭素が消費され有機物として固定されるが、過度の伐採や火災により植生が焼失した場合には、有機物の分解が卓越することになる。これは二酸化炭素の放出量に影響し、泥炭地に含まれる膨大な炭素量を考えた場合、全球の温暖化にも影響することになる。しかしこれらのプロセスについて、有機物分解者の動態と共に詳細に調査した例は皆無な

ため、急増しつつある荒廃泥炭地を考えると、急いで知見を収集する必要がある。我々は同時に、シロアリの有機物分解を通じて土壌の養分条件が改善するのではないかと仮説を立て、土壌養分の調査を始めている。これは植生の回復等、熱帯泥炭地の将来像を考える上で、重要な情報を与えてくれるものと考えている。社会科学の研究者も含めた我々の研究グループのキーワードは「Termite change the world!」であり、仮説が覆ってもよいので、新たな発見があると嬉しく思う。このように熱帯には、シロアリに関わる研究トピックがゴロゴロと転がっているように感じる。

本書を読み終えて、数億年前という人類が誕生するよりはるか昔からこのような高度な社会性を維持したまま暮らしているシロアリについていくらか理解でき、シロアリが少しなりとも可愛らしく思えるようになった。本書は、基本的に対研究者というよりも一般の読者に向けての図書であるため、理系文系かかわらず多くの読者に理解できるように書かれているように思う。また、「一（いち）」研究者としても、シロアリに関する知見だけでなく、研究対象に向き合う姿勢のあり方、仮説検証の進め方、仮説に対する矛盾を受け入れ、克服する姿勢等を学ぶことのできる図書だと感じた。シロアリという、少しとつきにくいタイトルにかかわらず、一読されることをお勧めしたい。

（伊藤雅之・京都大学東南アジア研究所）

参考文献

竹松葉子. 2012. 「シロアリの種多様性調査と環境」『シロアリの事典』吉村 剛；板倉修司他（編），11-17 ページ所収. 大津：海青社.

吉野馨子. 『屋敷地林と在地の知——バン
グラデシュ農村の暮らしと女性』地域研究叢
書 26. 京都大学学術出版会, 2013, 407p.

近年バングラデシュが日本のメディアで取り上げられる機会が増えている。バングラデシュといえば洪水やサイクロンといった自然災害が多発し、狭い国土に高い人口密度をもつことで知られてい

る。一昔前までは世界の最貧国というステレオタイプが前面に押し出されることも少なくなかった。評者が2002年に初めてバングラデシュを訪れた際も、貧しくても希望を持ってエネルギーに暮らす人が多い国という印象を漠然と感じたように記憶する。しかし2006年にムハマド・ユヌス氏がノーベル平和賞を受賞した頃から潮流が変化したように思われる。以後はマイクロクレジットのみならず日本や欧米のグローバル企業の進出先としても話題になっている。最近では、社会問題の解決のためのビジネス、ソーシャル・ビジネスの実験場としても注目されているようである〔ユヌス2010〕。評者は2013年に約8年ぶりにバングラデシュを訪れる機会を得たが、首都ダッカの大通りに掲げられた化粧品会社の巨大広告に圧倒され、郊外の高層ビルの中にある縫製工場へ通勤する女性労働者たちの姿を目にして、確かにこの国が変化しつつあることを感じた。ただグローバル化する経済の中でどこか浮き足立っているところがあるのではと一抹の不安を覚えたことも事実である。本書が対象とするのは、バングラデシュ社会の変化の著しい一面とは対照的な、地に足がついた農村の暮らしである。

本書は、著者が2009年に提出した博士論文をベースにして大幅に加筆、修正されたものである。1988年に調査を開始して以来、2009年まで20年以上にわたり著者が調査村落で行ってきた、ライフワークとでも言うべき屋敷地林研究の成果が凝縮されている。その成果は400ページ超の分量と、膨大な数の写真、図表に凝縮されている（写真137点、図45点、表67点）。本書の帯に書かれた「モンスーンアジアの資源利用を示す詳細なデータと生き生きとした描写」は決して大げさな宣伝文句ではない。他人の理論を援用して調査地域に当てはめるのではなく、自らフィールドで入手してきたデータそのものに語らせて地域の問題を浮き彫りにするというフィールドワーカーの姿勢が貫かれている。聞き取り調査、植生調査、マーケティング調査などから丹念に実証データを積み重ねて、定点観測でも長期間通い続ける中で常に視点を変えて対象に臨むことで、屋敷地林とそれを取り巻く村人の暮らしを立体的に描くことが試み

られている。

本書は3部、全10章から構成されており、章間に著者が調査中に出くわした村の暮らしの一場面や女性たちの生きざまが描かれたコラムが挟まれている。第1部「人が作った森」から持続社会を考える」では、本研究の位置づけと対象地域の概要が述べられる。

第1章「農村、屋敷地と『在地の知』」では、バングラデシュの屋敷地及び屋敷地林の特徴として、巨大なデルタという水文環境下で作り上げられる点と、農村女性が自由に動ける数少ない活動場所の一つであるという点の2つが挙げられている。そこで著者が注目したのが、住民が地域の自然との相互的な働きかけの中で培ってきた「在地の知」である。自然環境との関わりにおいて人々がどのように屋敷地を作り上げたのか、そして屋敷地及び屋敷地林はどのような役割を果たしてきたのか、その土地に暮らしている人々の総合的な知恵の体系を明らかにしようというのが本書の大きな目的なのである。

第2章「バングラデシュの社会・経済と調査村の概況」では、まずバングラデシュの社会・経済の概要が説明され、その後2つの調査村の自然環境と村の構成が述べられる。D村は活発な氾濫原内に位置し人口収容力が高く、K村は氾濫原中高地に位置し早い時期から村としての人口の集積が進んだという2村落の違いが示されている。

続く第2部「屋敷地の利用にみる生活知、在地の知の態様」の第3章から第6章までは、著者が1980年代末から90年代にかけて2村落で行った研究の成果である。

第3章「屋敷地の構造とその利用」ではK村を舞台に、屋敷地内部の構造と利用について池・中庭・叢林という異なる空間ごとに詳説している。同一の屋敷地内に住む複数の世帯が限られた庭をどのように相互に利用し合っているかなど、屋敷地がもつ社会的役割も明らかにされている。

第4章「屋敷地をもつということ」ではD村に舞台を移し、屋敷地の物理的な側面に焦点が当てられる。K村との比較も交えて叢林・池・庭などの構造を静的にみるだけでなく、相続による分割や新しく屋敷地を作る際の手順、洪水やスコール

で被害を受けた箇所は補修など、動的な側面からも屋敷地の所有法を見ている。著者は雨季の湛水時にも物理的に往来できるチャクラ（屋敷地塊）を意識することが重要であるとして、バリ（居住塊）との違いを図にまとめているが、屋敷地の基本構造を理解するためには、第1部で説明しても良かったのではと思われる。

第5章「屋敷地林の植物利用からみえる村人の生活知」ではD村の屋敷地林の植物利用について、食用、薬用、家畜飼料または薬、木材、燃料源、土留め、その他に分けて、村人が生活の中でどのような形で利用しているか説明している。本書が既存研究と異なる最大の点は重要度の高低に関わらずできるかぎり全植物の利用法の把握を試みている点にある。これによって「知恵の体系」と呼ぶべき村人の経験、工夫が明らかになっている。屋敷地林植物の多様性は単作化が進む耕地の多様性の低下を補う役割を果たしているという指摘も重要である。

第6章「“女性が育む森”——屋敷地をめぐる資源の利用と管理」では屋敷地という限られた空間で過ごす女性たちの家事労働、野菜栽培技術、食材と燃料確保、植物資源を得るネットワークなどが述べられている。本章で特筆すべきは女性のもつ豊富な知識を基にアクションプロジェクトの実施可能性を考察している点である。著者はプラントブック編纂、家庭菜園普及プログラム、村内調達による果樹苗木繁殖プログラムを取り上げて、外部からの技術導入が中心だった従来のプロジェクトが失敗に終わった要因を考察し、村人の知恵を生かした持続的な開発のあり方を提言している。

第3部「屋敷地林と暮らしの変容」では著者が2004年から2008年にかけて行ったフォローアップ調査の内容を基に、過去の調査内容と比較して屋敷地林の利用法や村の暮らしの変容について述べられている。

第7章「都市近郊化と屋敷地林の変化」では、過去20年間で村の中まで現金経済が浸透してきたために、K村では木材として現金収入が見込める植物が好まれ、かつては自給目的で栽培されていた果樹も販売に回す世帯が増えるなど村人の志向に一定の変化が現れていることを指摘している。

しかし植物種類の志向は変化しても、屋敷地林の植物そのものへの関心は低下していないというのが著者の主張である。農業の機械化が進み農作業の場としての役割が薄れたため、むしろ生活の場としての役割が大きくなっているという。都市近郊化という章題であるが、村の外部との関わりについて記載が少ないのが残念である。

第8章「屋敷地林の植生の変化が映し出す村の暮らしの変容」ではD村における植物悉皆調査の結果が2期間で比較されている。本章では屋敷地林の植生変化を「意図された変化」と「意図されなかった変化」に分けてジェンダーの視点から分析している。意図された変化の例としては、他の植物の生育に差し障る種ありバナナを減らす、市場性の高いナスとツルムラサキの栽培場所を屋敷地内から広い耕地へ移す、などが挙げられている。意図されなかった変化には、建物増加と土掘りによる栽培空間の減少、叢林の過剰な落ち葉かきによる野生種の幼樹の減少などがある。意図された変化は男性が能動的に働きかけた結果であり、意図されなかった変化の影響を受けるのは女性である。

第9章「屋敷地の社会経済的役割の変容」では屋敷地林の利用の変化について個人の活動とその社会経済的な背景に注目して分析している。過去の調査結果と比較した結果、D村の屋敷地は経済的価値を求める男性が撤退し、女性の領域に戻ってきたというのが著者の見解である。市場経済が浸透して女性の行動範囲が拡大しているとはいえ、女性たちの暮らしのベースは依然屋敷地にあり、屋敷地の外の環境が大きく変化する中で在来種の保持者としての女性の役割がますます重要になってきている。

最後の第10章「21世紀における屋敷地林の意味を考える」ではこれまでの議論が整理され、バングラデシュ農村で暮らす人々にとっての屋敷地の意味、屋敷地から考える「開発」のあり方、ひいては東日本大震災と原発震災を経験した日本人が学ぶべきことが述べられている。ここで再び「在地の知」がキーワードとして取り上げられる。屋敷地ではそれを取りまく水文環境、微地形、植物の特性への深い理解という「在地の知」が蓄積されており、内部に「共」的な空間を作り出すこと

で換金化できない多様な価値が提供されてきた。「緑の革命」や「ローン貸与」という個人の資源を増やすことを目標にしてきた農村開発プログラムとは正反対の思想である。著者は地方からのさまざまな資源を安価で手に入れ、意のままに消費しようとする都市の消費社会を見直し、地域の自然の理に根差した「共棲みの作法」を再構築するときだと述べて本書を結んでいる。

以上、各章を振り返ってみたが、屋敷地林の植生と利用法の多様性以上に、著者の研究視野の幅広さがうかがえる内容となっている。特に印象的なのは、慣習上弱い立場に置かれている女性の側に立って考えるという意識が貫かれている点である。多数の図表を一瞥しただけでは詳細なインベントリー調査が本書の中心であるように思えるかもしれないが、客観的な分析にとどまることなく、徹底して村の女性の視点から屋敷地林のもつ意味が述べられている。この視点ゆえに本書は既存の屋敷地林研究とは一線を画しており、男性主体に陥りがちな農村開発プロジェクトに投げかける意義も大きいのではないと思われる。

本書は徹底して屋敷地にこだわった内容となっているが、その反面、屋敷地が村の暮らし全体の中でどの程度の重要性を持っているのかについては必ずしも明らかにされていないように見受けられた。現金経済が浸透する中、屋敷地だけで村人の生活が完結するとは考えにくく、耕地の生産活動、農外活動、外部社会との関わりなど総合的な見方の中で屋敷地が存続する意味を考える必要があるだろう。この点については、本書で登場する村落において著者も関わった農村開発プロジェクトの成果が単著として出版されており〔海田2003〕、併読するとバングラデシュ村落の中の屋敷地の位置づけが明瞭になるかもしれない。その他に、読み進める中で2つの調査村の事例が交互に出てくる点もやや気になった。各章で述べられて

いる屋敷地の利用法や変化が2村で異なる生態環境に起因するものなのか、それともバングラデシュの屋敷地に共通して見られる現象なのか分かりづらく感じた。

本書にもある通り「在地の知」や「在来知識」の見直しが近年各分野で進んでいる。しかしその重要性について頭では理解できても、外部からフィールドに入り込む調査者にとっては何に着眼して調べ、得た結果をどう応用すればいいのか、現場で気づくのは簡単なことではない。しかし本書の成果は目に見える形での「在地の知」の集大成であり、その知恵の活用可能性についても触れられている。いわば「在地の知」について具体例を詳しく解説している教科書的な一冊となっている。これは調査地に20年以上通い詰めた著者だからこそなしえた仕事であろう。「私たちの暮らしは、この土地に存在し、持続していく」と覚悟を決めた人々の知恵や技術を学ぶためには、研究者の側にも相応の覚悟が求められているのである。その意味でも本書が対象としているのはバングラデシュに関心がある研究者だけではない。研究対象とする地域を問わず、フィールドワークを通して地域に住民が暮らし続ける意味を明らかにしようとする人々に広く読まれるべき内容となっている。

(浅田晴久・奈良女子大学文学部)

参考文献

- 海田能宏（編著）. 2003. 『バングラデシュ農村開発実践研究——新しい協力関係を求めて』東京：コモンズ.
- ユヌス、ムハマド. 2010. 『ソーシャル・ビジネス革命——世界の課題を解決する新たな経済システム』岡田昌治（監修）、千葉敏生（訳）. 東京：早川書房. (原著 Yunus, Muhammad. 2010. *Building Social Business: The New Kind of Capitalism that Serves Humanity's Most Pressing Needs.*)